

ブッシュ戦争断章

—「悪魔」が生きている国—

八 木 三 男

一、世界史的画期

八世紀盛唐の大詩人李白に「城南に戦う」という詩がある。古来、万里のあなたに出征して戦争は止むことがなかったといったあと、荒野の戦いの悲惨を描写する。

野戦 格闘して死せば

敗馬号鳴し 天に向かって悲しむ

烏鴛（からす、とび）人の腸（ぢふた）を啄（つ）ばみ

ふくみ飛んで上にかく枯樹の枝

士卒 草莽（そうぼう）に塗（ぬ）る

將軍 空しく鹽（しほ）か為（な）せり

兵士は草むらに野たれ死にし、將軍のやったことは無意味だった。詩の最後に

すなわ

乃ち知る 兵なるものはこれ凶器

聖人はやむを得ずして之を用うるを

いまこそ分かった。武器というものは不吉な道具で

ある。聖人はやむを得ないときしかこれを使わない。

これは老子の「兵（武器）なるものは不祥の器（道具）なり、君子の器にはあらず。やむを得ずしてこれを用うるも、恬淡（てんたん）（最小限）なるを上となす」という言葉を踏まえている。同じころの孫子にはつぎのような名句がある。「百戦百勝は善の善なるものにあらず、戦わずして人の兵を屈するは、善の善なるものなり」。

ヨーロッパ中世のキリスト教神学でも「正しい戦争」とそうでない戦争を区別し、乱された秩序を回復する場合だけ「正しい戦争」と規定して、戦争を抑制した。

紀元前五世紀の、戦争は回避すべきだという老子の言説が、人類の意思として国際法上具体性をもってはじめて確立したのは、老子から二五〇〇年後、ナチスや日本のファシズムを打倒して宣言した一九四五年の「国連憲章」においてである。その第五一条は自衛権を「武力攻撃が発生した場合」に限定し、その発動も「安全保障理事会が国際の平和及び安全の維持に必要な措置をとるまでの間」に限った。しかも、まず経済制裁などの措置がとられたあと、それらが不十分であると認められてはじめて軍事措置がとられる（第四一

条、四二条）。

しかし、この国際法の規定をその後アメリカ、ソヴィエトをはじめ主要国は一貫して踏みにじってきたが、なかでもアメリカは国策として核を伴う「先制攻撃」をかかげ、ヴェトナム、グレナダ、パナマ等を侵略し、その国の人民を殺戮してきた。必要ならテロリストを支援した。一九九九年にはこの戦略概念を同盟諸国に広げ、NATOを共同防衛の性格からアメリカの核に守られた先制攻撃の組織に変え、ユーゴ空爆を繰り返した。アメリカにとって最善の方策は些細に見えるものでも不安定な地域に対して、それが激化するまえにたたくこと、国連安保理の承認はいらない、というのがアメリカの世界政策である。日本は有事法、自衛隊派兵法でこれに呼応した。

しかし、今度のブッシュ戦争は違った。アメリカの無法な戦争をやめさせるために、国連安保理が創設以来あれほど奮闘したことはなかった。はじめて機能したのである。それだけではない。戦争がはじまるまえに、アメリカ、イギリスをはじめ世界の一千万以上の人々が高校生や子どもにいたるまでいっせいかつ明確に連帯を表明して戦争反対の意思表示を果敢に展開

した。戦争は阻止できなかったが、老子以来平和および人間の尊厳にかかわる意思表示を地球規模で行動で示した経験は、人類史上はじめての画期的な出来事だった。国連安保理も具体的な成果をその後あげていないものの、米英軍のイラク侵攻も軍事占領も認めず、初心を貫いて機能し続けている。これも画期的だ。

二、ブッシュは支持を失った

ブッシュの「主要停戦宣言」以後のアメリカ兵の死者が侵攻作戦を上回り、バグダッドの国連現地本部の爆弾テロによって国連の最高責任者が殺され、国内多数派のイスラム教シーア派の聖地爆弾テロでその最高指導者ら百余人が殺害されるなど、アメリカのイラク軍事占領は破綻した。米英軍事占領に妥協的だったイラク人の六割を占めるシーア派はこのテロを境に「反米反軍事占領」に政策転換した。アメリカはイラクの全人民だけでなくアラブ全体を敵にまわしつつある。「反テロ」ブッシュ戦争が逆にテロを拡大再生産した。

ブッシュ戦争のヴェトナム戦争化の惧れがでてきたといわれる。ヴェトナム戦争化とはアメリカの敗北を

意味する。そのために、アメリカは自軍を増派するかどうかは別にして、二の足を踏んでいる友好国の派兵と占領資金拠出を強要している。

最近、アーミテージ國務副長官は中東担当特使の有馬政府代表に「イラク支援から日本は逃げるな」「お茶会への出席ではない」と強い調子で自衛隊の早期派遣を要求した。これまで情勢悪化を理由に石破防衛庁長官が「年内派遣は難しい」といつていたものだが、福田官房長官はこの要請を受けて、現地の治安状況から「まったく派遣できない状況ではない」という認識を示した。独自の現地調査の結論いかんとは別に早期派遣もありうるということだ。

アメリカ国内はどうか。ネオ・コンサヴァティヴス（新保守主義者）が友好国の派兵待ちでは間に合わない、自軍を増派すべきだというのに対して、ラムズフェルド国防長官ら国防総省は派兵の削減を計画している。かたや、毎月四〇億ドル（四千七百億円）かかっている米軍駐留費に加えて、これからのイラク国家運営にどれだけ費用がかかるか見当もつかないといった財政負担の重圧もあって、権力内部の矛盾が一挙にふきだした。

なぜそうなったか。多くのアメリカ国民がいまやブッシュ戦争を見る目を急速に変化させて批判的になり、ブッシュへの支持が激減しているからである。

世論調査を公表した九月二日のニューヨーク・デーリー・ニュースによると、テロの対象になった当のニューヨーク市民がブッシュの「対テロ戦争」を支持しなくなった。支持する三四%、支持しない五六%。一年前と逆転した。来年秋の大統領選には六四%が民主党候補に投票するといひ、ブッシュ大統領は二〇%。大体がニューヨークは共和党の支持基盤ではなく、さきの選挙でもブッシュは一九%しかなかったが、元に戻ったということだ。九〇%もあったひとつころの高支持は霧消し、いまや五二%だ。

それにひきかえ、「反米主義」呼ばわりされて一時逼塞していた反戦運動が新たな高揚期を迎えつつある。世界の反戦運動の報道では『しんぶん赤旗』が断然他紙を圧倒している。九月二日の遠藤誠二記者のワシントンからの報告によると概略次のようだ。

ブッシュ戦争に従軍しているイラクのアメリカ兵家族らでつくる反戦団体「声をあげる軍人家族たち」(MFSO)が唱えた「われわれの部隊をいまずぐ故

国に戻せ」はいまや反戦・平和団体の合言葉になっているというのだ。テロ犠牲者遺族らでつくる平和組織「平和な明日をめざす9・11家族の会」(ピースフル・トウモロース)は「希望の輪」と名づけた行事で世界貿易センタービル跡を「人間の輪」で囲み、全米各地にも「希望の輪」に呼応した祈りの式の開催を呼びかけている。反戦連合体のひとつ「国際ANSWER(戦争阻止と人種差別停止を今こそ)」は一〇月二五日にホワイトハウスまで全国規模の大集会を計画している。

折も折九月三日、思い余って、いったんは国連を無視したアメリカはあらためて国連による多国籍軍のイラク派遣を安保理事会に提起したが、内容はアメリカの軍事主導に変わりはなく、まったく理事会の賛成を得られそうもない。追いつめられているアメリカはかなりの妥協をするかもしれないが、彼らの国家威信が危殆に瀕している。

三、「悪魔」が生きている国

ブッシュ大統領はイラク、イラン、北朝鮮を名指しして「悪の枢軸 (the axis of evil)」とこたえた。保

守的プロテスタントを強力な支持基盤とし、自らの信仰を誇り、実際に本人の発言によると神とじかに接触があるらしいが、テロに対する報復戦争を神の意志（十字軍）だと思っているキリスト教原理主義的なブッシュ大統領にとって、悪（evil）とは当然キリスト教の悪魔（devil）のことであらう。Evil One といえは devil（悪魔）のことだし devilish は邪悪の意味だ。彼はイスラム教をインチキ宗教（false religion）とのしったこともあるが、議会で、テロリストは「アジア・アフリカの広大な地域からキリスト教徒やユダヤ教徒を追い出すよう望んでいる」、これは「文明の戦い」だと演説した（〇一年九月二日）。

いまや、アメリカのイラク侵略の口実であったイラクに対するテロ集団の巣窟、大量破壊兵器、核武装という非難がすべてブッシュ権力の情報操作による虚偽報道であり、真実のかけらもないことがわかった。

わたくしはまえに、ジャン・クロード・シュミットの『中世の迷信』（松村剛訳、白水社）を引用して、悪魔は「人間をより巧みにだますために、必要なら虚偽にときおり真実を混ぜる」といい、ブッシュ戦争前に、ラムズフェルド国防長官が敵を欺くためには虚偽の報

道を流すことも辞さないといったとき、「かりに必要によって真実のなかに虚偽を混ぜた」としても、「必要なら虚偽にときおり真実を混ぜる」悪魔とどれほどの違いがあろうといったことがある（「魔女あるいは悪魔幻想」『にいがたの教育情報』69号）。

これは修辭にとらわれすぎた誤りだった。事実は真実のかけらもなかったのだった。わたくしはアメリカのヴェトナム侵略がトンキン湾事件のでっち上げから始まったことも、アメリカの権力が往々にして情報操作をし、名著『秘史朝鮮戦争』の著書 L・F・ストーンが「権力は嘘をつくものだ」といったことも知っていたが、いかにも不明だった。アメリカの嘘で固めた覇権主義のまえに悪魔も色を失う。

大体がアメリカは中世以来の最も典型的な悪魔がいまなお猖獗している国だ。ロベール・ミュッシャンプレの名著『悪魔の歴史』（平野隆文訳、大修館書店、二〇〇三年）は、ヨーロッパと違って「アメリカ合衆国は、悪魔の邪悪な力に対する強い信仰を保ち続けている」という。アメリカでは映画やテレビは悪魔の洪水である。たしかに「エクソシスト」「オーメン」「エイリアン」「バンパイア」等あげたらきりがなし。地球に

激突するアステロイド（小惑星）をNASAが核爆弾を使って回避するというブルース・ウィリス主演の「アルマゲドン」では、アメリカだけが小惑星が衝突する危機に見舞われた地球を救い得るのだ。アメリカ軍の栄光である。また、敵を極端に単純化した上で悪魔視する傾向が強いのもアメリカ映画の特徴だ。余談だが、アメリカ兵に対するイラク人の抵抗に向かってブッシュが「かかってこい」といったのは、テキサス牧場のチンピラガンマンの西部劇である。

これに対して、ミュッシュャンブレは早い時期に啓蒙思想を経験したヨーロッパでは、大多数の者にとって悪魔は死して埋葬されたものだという。彼は自身の体験に照らして、一九六〇年代を転換期として、フランスの若者は個人の意志の力を特権化して、悪魔的な共同体信仰を拒絶するなかで成長したとする。ヨーロッパの悪魔はすでに人間臭くなって久しい。マルセル・カルネの「悪魔が夜来る」（一九四三年）はわたくしの一九五〇年代の青春を記念する映画だ。悪魔は不気味な面相だが、結局はそれはジュール・ペリー演じる人間臭いものになった。悪魔は若い恋人同士の愛には勝てない。この映画はナチスに対する抵抗を含意した。

ブッシュ権力はアメリカの伝統にしたがってサダム・フセインを単純化して悪魔に仕立て、ピンポイント攻撃といいながら、多数の無辜のイラク人民を殺戮した。それはトルーマンが、原爆は軍事都市ヒロシマに投下するのであって、非戦闘員である市民のことは配慮しているといったといわれるのと一般である。実際にフセインを筆頭にアラブ国家を支配している権力はおぞましいものが多いが、しかし、上記のようなことはアメリカにとってはどうでもよいことである。真の狙いは、「自由」の輸出を名としてアメリカの影響下でアラブ世界全体を作り変えることにある。そして、さらに悪いことには、多くのアメリカ市民がアメリカのこのようなアラブ戦略が基本的には善意に基づく利他的なものだと信じこまされていることだ。

四、強者は単独で最も強いのか？

◆「世界観」というものは、決して他の世界観と並存しようとする意志はないのだから、その世界観が、有罪なりと判定をくだした現存状態と協働していこうというつもりはなく、反対にこの状態と自分に敵対するすべての理念界にあらゆる手段で闘うこと、すなわちそ

の崩壊を準備することを義務と感ずるのである」

「世界観は不寛容でなければならない。……圧制は圧制によってのみ、テロはテロによってのみ破ることができる」

テロ組織とはむろん共存はできないが、事実はどうであれアメリカがテロ国家と認定しさえすれば、あるいは国家または地域に「民族的、宗教的抗争……人権侵害」(一九九九年に策定したNATO新「戦略概念」)がある場合も、世界のどこでもその紛争が激化するまでに、核使用も辞さない先制攻撃でたたく。また、アメリカの脅威になりうる国が想定されれば、たとえば、核兵器を使う新たな不測の事態にアメリカが直面しているとして、核攻撃の標的にする。二〇〇二年の「核態勢見直し(NPR)」で、標的として、さきの「悪の枢軸」国の他に中国、ロシア、シリア、リビアをつけ加えた。

◆「すべての世界では、ほんとうに偉大なものは共同戦線によって闘いとられるものではなく、つねにただ一人の勝利者の成果」である。共同戦線は「将来の崩壊、またそれ以上に、到達したものを喪失する萌芽をもっている」「偉大な、ほんとうに世界を変革させる

ような精神的な革命は……単一組織の巨人のような闘争としてのみ考えうる」。

『教育情報』本号巻頭の「平和のためのアピール」の文言を借りていえば、ブッシュ政権の中枢を形成し、またそれに強い影響力をもつとされるネオ・コンサヴァティヴス(新保守主義者)は次のようにいう。アメリカは「神の摂理」で定められた「諸国家のなかの国家」である。世界はヨーロッパを除けばいまなお弱肉強食の世界であるから、そこでの国家の安全と成功を最終的に決定するのは唯一の軍事超大国として全世界に全責任を負うアメリカの軍事力だけだ。世界をとりしきり、そのルールを作るのは唯一アメリカだけである。

国連との共同すなわち安保理の承認なしに、必要な目下の同盟国と共同して些細に見える紛争でも介入する。どんな事態が発生するかもしれないから、国際刑事裁判所もいらないし、自国の利益を考えれば、世界の自然環境の保全にも積極的にはなれない。

◆印のついた括弧内の引用文は実はヒトラーの『わが戦争』下巻(平野・将校共訳、角川文庫、一九七九年)の第五章(世界観と組織)と第八章(強者は単独で最も強

い)からのものである。歴史時点も国家体制も文言のシチュエーションもまったく異なるから、厳密な検討なしには言葉遊びにすぎないが、「国際主義」の反対語であるアメリカの「単独行動主義(ユニラテラリズム)」がいかにか傲慢で異様なものかは推定できるであろう。

その根拠になる思考パターンにはE・W・サイードによるとつぎのようなことがあるらしい。「アメリカの体制内の人々は例外なく……アメリカは最高であり、その思想は完璧で、歴史には汚点がなく、その行動は人類の偉業と偉大さの最高水準にある」。したがって、反米主義は天下の大罪であり、それは「正直な批判からではなく、善良で純粋なものへの憎しみから生じたもの」である(中野真紀子訳『暴かれた民主主義』、みすず書房、二〇〇三年)。ブッシュもいう、テロリストが「アメリカを憎むのは我々が自由を愛しているからなのです」。

考えてみると、ブッシュやわが小泉首相のある種の「決断主義」や「敵味方的二分法」の単純にして非論理的な論理は、ヒトラーの論理に似ているといえなくもない。小泉首相とブッシュをヒトラーに擬する論議

もあるようだから、この機会に『わが闘争』を通読してみようと思った。しかし、手許にある角川文庫の『わが闘争』上・下巻はあわせて九百ページにもなる大部なもので、内容も「知性のある人なら誰でも吐き気もよおす」代物である。(K・D・ブラッハー『ドイツの独裁I』山口定他訳、岩波書店、一九七五年)。通読するのは簡単ではなかった。ヒトラーのものすごさとも恐ろしさは、この「吐き気をもよおす」言説の最悪のものを実際の政治のなかで現実化したことだ。

共同を軽蔑して事実上「単独行動主義」をとったヒトラーは国際的な反ファシズム統一戦線の反撃によって無残な敗北をしたが、アメリカの「単独行動主義」も国連を中心に結集する平和のための国際的連帯によって、手痛い敗北を喫する可能性がある。

紙幅も尽きたから、最後に紹介しておきたいヒトラーの演説がある。一九三八年にドイツはオーストリアを併合し、ヒトラーはそれを「解放」といったが、四月、ウィーンでの演説の最後にこう語った。「オーストリアをドイツ帝国に統合することを可能ならしめたもうたのは、神の意志にほかならない。この世には定めというものがあ、われわれはこの定め、の道具以外

のなにもものでもない」。このように達成された政治的現実を正当化するために、演説などでは彼はまた、「主の恩寵」や「摂理」という言葉も多用した。(宮田光雄『ナチ・ドイツと言語』岩波新書)。E・W・サイードの前掲書によると、ブッシュの言葉にしたがえば、ブッシュは神と、少なくともプロヴィデンス(神意)と接触があるのだそうである。また、彼は二〇〇三会計年度の軍事費を一五%増額すると発表した時も「われわれの第一の優先課題は軍だ、神から呼びかけられた最高の使命だ」と演説した。その神意(神の意志)によって彼はイラクを侵略したのである。

「付記」この小文の校正中の九月二五日、コロンビア大学教授(比較文学)、パレスチナ出身のキリスト教徒、E・W・サイードが死去した。白血病。六七歳。最近ではアフガニスタンやイラクへの武力行使に反対する論陣を張った。大江健三郎は、「土地も資産も希望までも奪いとられたパレスチナ人たちの苦しみを引き受け、強く発言し続けた、美しい知識人をうしなった」といって哀惜した(『朝日新聞』九月二七日)。

(やぎ みつお・にいがた県民教育研究所所長)

